

歴史と街づくり活動の経緯

1) まちなみの歴史

吉備の国、備中矢掛では記紀にも記されるほど開けた地域であり、古代山陽道は京都と大宰府を結ぶ最高ランクの「大路」でした。

近世には山陽道の陸路と県の西部を流れる高梁川支流の小田川水路の交点として水陸両路よりなる物資の集散地として栄えていました。

ことに寛永12年(1635年)の参勤交替制の確立によって矢掛宿には多くの大名が宿泊することになり宿場として整備が進み、本陣・脇本陣は全国にも例を見ない良好な保存状態で国指定重要文化財として顕在しています。また江戸時代の末期から明治・大正にかけ建てられた町家が今も多く立ち並び宿場町の往時を偲ばせています。大屋根を飾る様々な形の鬼瓦は多様で意匠的にも優れており、かつて瓦がこの地方の特産品であったことを物語っています。

1960年代商店街の近代化ブームにより建物前面に看板・パラペット・ファサードを設けるなどして改造され街並みの歴史的景観を失い雑然としていました。しかし2階のファサードの壁の裏にはしっかりとした伝統的な本葺き屋根が残されており矢掛宿の街並みを再生することが可能でした。

旧山陽道の第18番目の宿場町 備中矢掛宿



江戸時代からの本陣・脇本陣が全国で唯一、共に現存し国の重文に指定されています。